

『毎日新聞』(11月14日(月)夕刊)

シリーズ<現在>への問い 第4部 創造力の行方⑥

「これからの若者にとっての『立身出世』とは？」

玄田 有史

現代の若者の口から立身出世という言葉など、ついぞ聞いたことがない。立身出世とは、辞書風にいえば「社会的に認められた高い地位に就いて有名になること」といったところだろう。

だが、口にしない、言葉を知らないからといって、立身出世を目指す若者が社会から消えたわけではない。ミュージシャンやお笑いタレントとして、評価と名声を獲得する目標を追い求め続けている若者たちはいる。ITや金融といったビジネスでの一攫千金を目指し、将来は渋谷や六本木の高層ビルに自分の城を築くことを目論む若者もいる。

その一方で、すべての若者にとって高い地位やそれに応じた多くの収入を得ることが人生の第一目標かといえ、それは違うだろう。若者が第一に求めるのは、かつてのような「収入」や「安定」「名声」ではない。何より「やりがい」そして「自分らしさ」だ。社会が羨むような「ナンバーワン」の有名な地位より、心から満足といえる自分にとっての「オンリーワン」の仕事をしたいと思っている。

青少年に関する国際調査をすれば、中国や米国の若者などは、躊躇なく将来の社会的成功、すなわち立身出世した未来を公言して憚らない。日本の若者は、そんな大それた夢より、自己実現といった内的充実を求めがちだ。社会的影響力を欲しない日本の若者の姿に、もどかしく物足りない印象を持っている大人もいるだろう。

しかし私は、若者が地位や名誉ばかりを求めて生きる社会を望ましいとは思わない。家庭や教育といった、個々のおかれた環境の違いを考えれば、出世の夢に溢れた社会の実現など、土台、不可能だと思う。

かつての若者であれば、実現可能性など深く考えることもなく、無邪気に成功を夢見ることが出来た。しかし現代の若者には多くの情報や知識がある。芸能分野で成功するのがほんの一握りに限られることを知っている。ITや金融での成功が、いかに一時的で刹那的なものであるかを感じ取っている。頻発したリストラや不祥事を見て、偏差値の高い大学を出て有名企業に入社して昇進するのが立身出世の成功モデルとは、実感しにくくなってきているのも現実だ。

東京大学社会科学研究所が行っている「希望学」プロジェクトには、こんな調査結果がある。20代から40代の大人に対し、小学6年と中学3年のときになりたいと思っていた職業に、どの程度が実際就いた経験があるかを訊ねてみた。すると夢の実現率は、小学生当時の希望については8パーセント、中学は15パーセントにすぎなかった。希望の多くは実現しないことを多くの若者は知っている。現代の若者は現実的だ。自らの限られた可能

性のなかで、自分にとっての希望の実現をささやかに求めている。その姿はけっして悪くない。

ただ、立身出世がしょせん夢物語だからといって、未来に希望を失う若者が増えていく現状が望ましいものだとも思えない。先の希望学調査によると、働いた経験のある人々のうち、仕事にやりがいを感じる機会は、実現しなかったにせよ、過去に何らかの職業希望を持っていた場合が多くなっていた。希望が叶わず途中で挫折した人ほど、その経験から本当に自分に向いたこと、やるべきこと、出来ることを知る。そして結果的により充足した仕事に辿りつく。希望がなければ、挫折も出来ない。そうなると、多くの若者が求める自分らしさの獲得も難しくなるのだ。

挫折を一つの糧として新たな希望につなげていくには、本人にある種のタフネス（逞しさ）は必要になる。それは、失敗や挫折に対して過度に反応することで一切の希望を失うといった状況に落ち込むことなく、前向きに未来を創造し続けていくためのタフネスだ。

しかし、そんな強さや前向きさをすべての若者個人の資質に求めるべきではないだろう。どんな時代でも、若者が皮向けて未来を切り開くことが出来たのは、本人の自助努力のせいだけではけっしてない。育成、教育、もしくは支援という名による、大人の積極的な関与によって、きっかけを得てきたはずだ。適度に失敗と修正を繰り返すチャンスを大人がもたらすことで、これまでの若者も未来を創造するタフネスを身に付けてきたのではなかったのか。

ニートやフリーターの一部が社会問題化している。それは若者の社会的状況の不安定さを示すだけでなく、逞しさを得るチャンスを失った若者の広がり象徴しているからだ。

そもそも立身出世の立身には「一人前になる」という意味がある。若者が立身出世するには「一人前にする」大人の存在が不可欠だ。自己責任が強調される現代で、社会的欠如が懸念されるべきは、出世したいという若者自身の覇気ではない。一人前になる上で、「多少の失敗は問題ない」「挫折したときにどうするか」という、大人の知恵と経験を若者に伝える機会が失われつつあることこそ、真に問われるべきなのである。